

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します



合田 直弘

海外競馬の最前線で話題となっている、旬な馬や人を取り上げるこのコラムの、今月の主役は、クリストフ・スミヨン（41歳）だ。

もともとこの御仁は、華々しい活躍が「最前線」で評判となったわけではない。はつきり言って、立っているのは悪評である。彼が引き起こしたのは暴力沙汰で、まき散らしたのは醜聞だった。

競馬とは時として、はからずも肉弾戦となることがあり、どれほど避けようとも、レース中に馬同士・騎手同士が衝突することが起こりうる。そこに遺恨が生じ、終了後の検量室で騎手同士がつかみ合いになることもあるし、ゴールした途端に馬を寄せて行き、電光石火のパンチを繰り出すという、血の気が多い輩が起こした事件もあった。

そういう暴力沙汰の中でも、ことさらにタチの悪い所業に、あろうことが、フランスでリーディングの座に就くこと10度というトップジョッキーのスミヨンが及んだのである。

凱旋門賞の開催を2日後に控えた9月30日、サンクルーで行われた2歳馬のG3トーマスプリヨン賞のレース中に、それは起きた。スミヨンの騎乗馬は4番人氣のシロス（牡2歳で、序盤は6頭立ての6番手に位置した）。

向こう正面の、残り1000m少々の地点に差しかかると、スミヨンはじわりと番

手を上げにかかった。とその時、外を走っていたロツサ・ライアン騎乗のキャプテンヴィルツバ（牡2歳）に馬体を寄せていくと、彼は右肘を大きくグイと張り出したのである。スミヨンのエルボスマッシュをまともに喰らってしまったライアンは、たまたらずバランスを崩し、あわれ馬の外側に転がり落ちることになった。

幸いにしてライアンに大きな怪我はなかった。だが、この模様を正面から捉えた映像を確認した競馬ファンの皆様ならおわかりと思うが、ひとつ間違えば大怪我をしていてもおかしくない落ち方、公平に見て、スミヨンは暴行傷害の確信犯だった。

2着で入線したシロスは、当然のことながら失格処分となり、3着に入線したメイクミーキング（牡2歳）が2着に繰り上がった。その後、フランスの競馬統括機関であるフランスギヤロは、スミヨンに対し60日間の騎乗停止処分を申し渡した。ただし、この処分が決まったのは、事件が起きて4日後の10月4日で、なおかつ、騎乗停止期間が始まるのは10月14日からという裁定だった。

このあたり、日本であれば、レース直後に裁決の処分が決まり、次の開催日から騎乗停止となるところだが、フランスをはじめとした諸外国では、事象が起きてから処分が決まるまでにタイムラグがあり、処分が執行されるまでに、さら

にまたタイムラグがあるのが、慣習となっている。そういうものである、と、関係者もファンも普段は頭で納得しているのだが、今回ばかりはいささか空気が違った。事件が起きた翌日と翌々日は、フランス競馬界が1年を通じて最も華やかに彩られるアークウィークエンドの開催日だったのだ。その、世界が注目するビッグイベントで、犯罪人が平気な顔で騎乗していてよいものか？！

その後フランスギヤロは、妨害行為発生から騎乗停止までのプロセスを、出来るだけ早い段階で見直すことを決め、これを発表している。その一方でスミヨンは、2014年から継続していたアガ・カーン殿下との騎乗契約を、即刻打ち切られることになった。また、この秋は日本で短期免許を取得して騎乗する予定だったが、これもご破算となっている。

それでも、犯した罪に対する代償としては、まだ不十分という空気が、欧州競馬界には依然として色濃い。そのあたりは本人も自覚しているようで、スミヨンは後日、英国調教馬キャプテンヴィルツバがサンクルーまで輸送されてくるにあたって掛かった経費7278,74ユーロ（約104万円）を、自らが負担することを申し出、キャプテンヴィルツバの関係者もこれを受け入れている。